「学ぶ意欲の向上」を目指し、四つの「学びの心」を大切にした授業づくりと家庭学習推進の取組

岡山市立大元小学校

1 はじめに

「指示されたことには真面目に取り組むけれど、自分から動こうとしない」と悩む先生方の声をよく耳にします。これは「学び」の場に限らず、子どもの生活全般に見られる傾向ではないでしょうか。

「もっと意欲的に取り組む子どもを増やしたい」という願いから本校の研究は始まりました。

2 本校の取組

子どもが意欲的に動く時は、何かに刺激を受けた「心」が動いた時だと考え、課題解決学習の流れの中に、次の四つの「学びの心」を想定しました。

・〇〇について考えたい。
・最後までやり遂げたい。
・友達の考えを知りたい。
・次もがんばりたい。

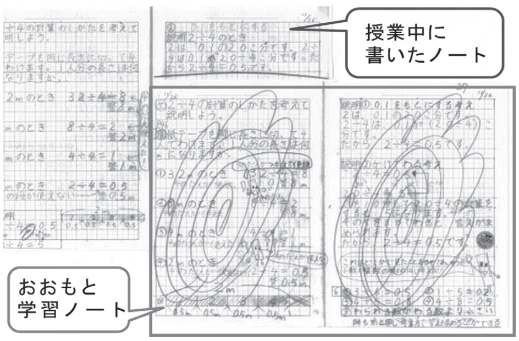
確かに、このような「学びの心」が動けば、意欲的に取り組むとは思いますが、実際の授業で教師がどのような支援をすればよいのかがイメージできず、試行錯誤を続けました。

まず取り組んだのが、「考えたい」と思わせる支援です。「初めての内容だから」というだけでも「考えたい」とは思いますが、いざ解決するとなると壁にぶつかり、くじけてしまいます。だから、「何とかなるかも」といった見通しを持たす活動等が有効であることが分かってきました。

また、見通しを持って始めた解決活動であっても、進めるうちに「これでいいのかな？」と不安になり、途中で止まってしまう子どもも多くいます。そんな子どもには、正答まで導けていなくても、部分的に認めるようにしました。その結果、自分の考えのよさを認めてもらいながら解決できる子どもが増えてきたように感じています。

部分肯定スタンスで机間指導

授業後の子どもの多くは「今日は〇〇が分かった」と言います。でもそれは「分かったような気がしている」だけで「分かったつもり状態」であることが多いと考えました。そこで、新たな知識を作り出した授業の流れを振り返らせるために、メモ程度しか書けていなかった授業ノートを使って、家庭でまとめ直す「おおもと学習」を工夫しました。



授業ノートと、それをバージョンアップさせた
おおもと学習ノート

3 おわりに

紹介した取組は、今年の11月11日に「中国・四国算数・数学教育研究（岡山）大会」の小学校部会公開授業の中で発表する予定です。

（校長　深井　文雄）

どの子も伸びるという教員の信念と愛情に満ちた教育実践の取組

美作市立勝田小学校

1 はじめに

課題に対する知識が不十分なために、授業の中での思考が難しく、理解不足の授業になっていました。そのため、中学年から顕著になった学力低位の状態が、卒業まで継続するという実態が何年も続いていました。

2 取組の実際

(1) 授業改善による基礎基本の確実な習得

「教えて考えさせる授業」を核にした授業の構造化（予習・理解確認・理解深化・ふり返り）と、「予習→学習→復習→ふり返り」のサイクル（週間、学期、年間）の確立。学習規律の徹底、教室環境の整備、板書の構造化、ＩＣＴの活用と授業のユニバーサルデザイン化の推進。

(2) 予習・復習を中心にした家庭学習習慣の定着

中学校のテスト期間に合わせ、予習・自主学習週間の設定。合わせて、メディアコントロールも目指す「生活ばっちりカード」の活用。

(3) 朝学習・放課後学習等、個に応じた補充指導

年数回実施したアセスメントテストの結果をもとに、プリント（夏・冬チャレ、問題データベースプリント等）を活用した個に応じた「ふり返り学習」の徹底。特に、全学年で実施する、美作大学と連携した補充学習での、大学生による授業中・放課後の児童への個別学習支援。

(4) 夢や目標をもつことの大切さを理解させる指導

夢や目標の大切さを中心に置き、お互いに学び合い、高め合おうとする心を育てる「道徳教育」を大切にした学級経営。また、社会マナーを育てるためのボランティア活動や縦割り活動の活性化。

(5) ＰＴＡ・地域組織の活用

学校支援地域本部的性格の「勝田小学校区委員会」との連携と、地域行事への参加促進による人間力の育成。

3 おわりに

児童の「意欲的に学びに向かう姿勢」と、1時間の「見通し」をもって授業に取り組む姿が見られるようになりました。その結果、児童の内容理解が確実になり、「授業が分かりやすい。」という言葉も多く聞かれるようになりました。また、学力調査等の結果から、「思考力」に伸びが見られ、全国学力・学習状況調査において、3教科全てで全国平均を上回りました。

今後も家庭・地域、大学等との連携を通じて、振り返り学習や予習・自主学習の充実を図っていきたいと思います。

（校長　片山　圭介）

長期宿泊体験活動を核とした学級経営の改善と学力向上の取組

瀬戸内市立行幸小学校

1 はじめに

本校の指導の重点の一つである「豊かな心」の育成において、「自尊感情を高める」ことを大切にして取り組んできました。しかし、平成25年度の全国学力・学習状況調査の児童質問紙結果では、「ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがある」「難しいことでも失敗を恐れないで挑戦している」「自分にはよいところがあると思う」の3項目で「当てはまる」と回答した児童の割合が、県の平均より5～12ポイント下回る状況が明らかになりました。

2 取組

そこで、平成26・27年度の2年間、県の「小学校長期宿泊体験推進プロジェクト事業」を核に体験活動や話合い活動の充実を図り、子どもたちが「達成感」や「成就感」をもつことができるよう取組を進めました。

(1) ビーイングの手法で

学年目標の言葉の意味や様子を話し合って共有したり、目標達成のために必要な行動やこれを阻害する要因を模造紙に書き記したりして、学級づくりのイメージを具体的にとらえていきました。

(2) 困難な状況を与える

長期宿泊体験の中では、三つの観点でメニューを構成しました。

①克服すべき困難性があるもの
②協力による達成感があるもの
③日常では体験できないもの

平成26年度は、毎年中学校区の3小学校が合同で行う1泊2日の海事研修を実施した後、行幸小が単独で旧吉川中学校グラウンドを借りて防災体験をしました。メインの活動はテントを設営しての野外宿泊と野外炊事でした。テントの設営の仕方は指導せず、大人の示範モデルから学び取らせました。

中学校グラウンドでのテント設営

平成27年度は、中学校区3小学校が合同で3泊4日の全日程を渋川で行いました。メインの活動は、渋川海岸から竪場島を一日かけて往復するロングカッターと3校の児童が入り交じった班編成での活動です。カッター以外の活動と生活を全てこの班で行動しました。

協力や意思を伝えることの大切さを実感するとともに、目標達成には自分自身の行動が鍵を握ることを学びました。

(3) 目標の達成度を共有する

年度当初に「ビーイング」で作成したものを、長期宿泊体験中だけでなく、年間の様々な行事や取組のたびに達成度の確認に活用しました。できたところやできなかったところ、新たに課題となったものなどを書き加えていき、その時々の学級の状態を学級全体で共有していきました。

3 成果と今後に向けて

困難な状況を克服する経験を積み重ねることと、その成果を目に見える形で共有することで、子どもたちの表情に変化が見えるとともに、行動にも積極性が出てきました。それは学習場面でもみられるようになっていきました。

平成27年度の学力・学習状況調査の結果では、前述の質問紙調査項目すべてで県や全国の平均を超える値を示し、学力調査でも3教科とも県・全国平均を超えた正答率となりました。

今後も児童の自尊感情を高めるのに効果的な体験活動をさらに進化させて取り組みたいと思います。

（校長　東南　信行）

小学校と連携し、教職員が協力して組織的な生徒指導を推進した取組

総社市立総社中学校

1 はじめに

本校は、総社市西部（高梁川以西）を学区とし、住宅地や田園地帯が広がる自然環境の豊かな地域にあります。学区の小学校は4校あり、いずれも小規模校で、生徒は、固定された人間関係の中、本校に進学しています。

数年前には、生活面での落ち着きのなさが見られる生徒を中心に問題行動が増加し、授業中騒がしく、生徒が落ち着いて学習できない状況となるなど、生徒指導上の課題を抱えていました。

2 本校の取組

①学校生活上大切にする三つの心得

落ち着いた学校環境の形成に向け、学校生活上の心得を次の3点に重点化して生徒に示し、積極的生徒指導を推進しました。

一　気持ちのよいあいさつをしよう

二　人の話に心を寄せて聴こう

三　時間前行動を心掛けよう

特に、気持ちのよいあいさつについては、本校生徒会が平成25年度から「日本一あいさつのできる学校！」をスローガンとして掲げ、毎朝、生徒会執行部が早朝あいさつ運動に取り組むなど、生徒の主体的活動が成果を上げています。

②校区内小学校との連携

平成26年度から、本校区内の4小学校と共に小中一貫学びの向上プラン（「まさきプラン」）を策定し、授業の始めと終わりのあいさつの仕方（先言後礼、相手の目を見る）を統一・徹底するとともに、家庭での学習時間や就寝・起床時間など、規則正しい生活習慣の確立を図る取組を進めました。

また、毎月10日の早朝には、生徒会役員が「あいさつ大使」として校区内4小学校を訪れ、校門付近で地域の方々と共にあいさつ運動を実施しました。

③だれもが行きたくなる学校づくり

一次～三次的生徒指導を同時に多角的に展開する（マルチレベルアプローチ）プログラムである「総社市だれもが行きたくなる学校づくり」においても、研究・実践に取り組んできました。特にそのプログラムの四つの柱である「SEL」「ピア・サポート」「協同学習」「品格教育」については、校区内の保幼小中が連携し、系統的・継続的な取組となっています。特に、異校種間のピア・サポート活動等が、「まさきプラン」や「あいさつ大使」の取組を支えています。

3 成果

こうした取組により、規律ある落ち着いた学習環境が整い、生徒は意欲をもって主体的に学んでいます。また、放課後補充学習等の個別支援も充実し、各種学力調査における平均正答率も改善しています。

さらに、平成27年度からは小中連携加配が本校に配置され、校区内4小学校5・6年生の算数科授業実践に本校数学科教員が参画するなど、小中連携の取組も次の段階に進んでいます。

4 おわりに

平成27年4月、本市では、「総社を愛す子供」「心優しい子供」「礼儀正しい子供」の三本柱からなる教育大綱が策定されました。総社中学校区においては、キャリア教育を通して、わがまち総社に誇りをもち、「総社を愛す子供」を育むことができると考え、地域の方々の参画による様々な体験活動や、職業人の話を聴く会を実施するなど、新たな実践に取り組んでいるところです。また、保幼小中の連携による「まさきプラン」や「だれもが行きたくなる学校づくり」の取組を核として、「心優しい子供」「礼儀正しい子供」を育成しようとしています。

これらの取組を通して、将来の夢の実現に向けて意欲的に学ぼうとする児童生徒を育成するとともに、教育大綱の具現化を目指していきます。

（校長　藤丘　真治）

学力向上・生徒指導を主眼にした小中連携の取組

岡山市立御南中学校区

（御南中学校・御南小学校・西小学校）

1 はじめに

本中学校区は、急激な都市化による地域社会や家庭の変化に伴い、生徒指導をはじめとする様々な問題が、近年一気に表面化してきました。

そこで、生徒指導上の問題の沈静化を図り、落ち着いた学習環境を取り戻すことで学力の向上を目指すことを目標に掲げました。その具体的手立てとして、岡山市の教育構想である『縦糸と横糸』による地域協働態勢の確立を模索することとしました。

2 中学校区の具体的な取組

（1）『縦糸』の強化

縦糸とは、12年間を見通した学びの連続性を重視するために、中学校区内の保幼小中特（県立西支援学校）間の指導面の連携を意味します。現在、次のような中学校区統一の取組がなされています。

- ○ＥＳＤ活動の目標の摺り合せ
- ○特別支援教育の視点を生かした授業改善の合同研究
- ○メディアコントロールの取組
- ○品格教育の実践
- ○ライフスキル・トレーニングの実施

また、校区内の日常的な生徒指導体制を確立させるため、今年度から、中学校生徒指導主事の小中兼務による定期的な小学校勤務も行っています。

（2）『横糸』の強化

横糸とは、地域の有識者や関係組織・団体の教育力の結集を意味しています。本来、本校区は、地域の自治的組織の活動が活発で学校変革への協力支援が得やすいという強みがあります。

そこで、平成24年度から地域協働学校（岡山型コミュニティー・スクール）の指定を受け、学校園と各組織・団体との組織的な連携体制を整備確立させ、必要な具体的人的支援を得安い環境づくりを行いました。

（3）『縦糸と横糸』を結びつける地域協働学校組織

本校区の地域協働学校の特徴は、地域のポテンシャルを最大限に引き出す組織構成にあります。

- ○組織全体をまとめる「連絡会」
- ○校区共通の学校評価項目をもとに校区の課題を明らかにする「評価部会」
- ○授業改善や学力向上の校区としての取組を推進する「学校教育部会」
- ○個別対応を含めた生徒指導上の諸問題について地域が連携して学校の力となる「健全育成部会」
- ○地域の行事等への子どもたちの参加を推進する「地域連携推進部会」
- ○学校支援ボランティアの活動を通じて学校を支援する「学校支援部会」
- ○保護者や地域への広報活動を行う「広報啓発部会」

この組織が機能するようになると地域の方々の校区への熱い思いが徐々に結集され、他の校区にはない特徴的な活動が展開され始めました。その例として、

○西小学校区では、学校への理不尽なクレームに対して地域のリーダーが学校の後ろ盾となる仕組みが設けられた。

○御南中学校では、地域の有志が校内見守り活動や個別学習指導を行う「スクール・パートナー」組織が立ち上がった。

などがあります。

3 取組の成果と課題

中学校区の学校園が同一歩調で学校園を組織的に開き、学校園内外の教育力を有機的共同的に活用できる体制を導入したことにより、生徒指導上の問題に改善が見られたり、児童生徒のボランティア意識が向上したりと、一定の成果が実感できるようになりました。しかし、学力向上に向けての取組は緒に就いたばかりで、継続的にきめ細かな日々の取組の積み重ねが必要とされているのが現状です。

今後は、ＰＴＡ組織も有機的に連携させながら、地域の力をさらに学校の力へと変えていくための取組の充実や工夫が求められていると感じています。

（校長　小野　恭弘）